

記 恋 里

雄 秀 門 寺

昭和42年 9 月25日印刷

昭和42年 9 月30日発行

著 者 寺 門 秀 雄

発行者 飯 野 一 雄

印 刷 殖 産 堂 印 刷 所

製 本 村 上 製 本 所

発 行 所 創 思 社

東京都港区北青山3丁目5—8（水田ビル）

TEL (408) 7 5 9 7 番

振 替 東 京 7 1 3 2 7 番

落丁乱丁はお取替します。

定価 600円

寺門 秀雄

里恋い記

創思社



目

次

一	川の上の田
二	高峰家
三	兄と弟
四	分教場
五	免状式
六	伐られる大樹
七	隣人
八	伯父の来訪
九	故郷よ、さらば
一〇	第二の父母
一一	都会の学校
一二	砂利敷きの校庭

83	77	67	62	56	51	44	37	29	22	13	9
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

一三	猿江裏町
一四	江東の少年たち
一五	夏休み
一六	最初の帰郷
一七	坂の出来事
一八	硝子工場
一九	良友
二〇	釣魚のはなむけ
二一	かいぼりと夕立
二二	落伍者
二三	春吉の転職
二四	小僧と中学生

188	183	172	161	150	145	139	128	117	108	98	88
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

二五	夏の日の哀傷	194
二六	裏町の中学生	204
二七	帰郷四たび	212
二八	兄の上京	220
二九	私立中学で	226
三〇	関東大震災	235
	あとがき	266
	カバー・扉 版画／棟 方志 功	

里
恋
い
記

一 川の上の田

「宗次よ、なにぐずぐずしているんだ。さっさとやんねえと、きょう中にや、おやせねえぞ（おわらせ得ない、の方言）」

母親のお絹の神経質な声がまた飛んだ。腰から上を丸くエビのように折りまげた彼女は、菅笠をかぶった首だけをねじむけて、怠けている息子をどなるのである。それにつられて、父親の宗太郎も顔をあげた。

「うーん」と宗次はあぜの上で生返事をする、やけくそに泥水をはねかえして、田へ踏んごんだ。足もとの殿様ガエルがおどろいて水中に身をかくしたが、すぐ一メートルばかりはなれたところへポツカリ顔を出し、横目をつかっている。それを待ってたように、宗次は手にした泥をビシッと投げつける。カエルはふたたび身をかくし、今度は近くへは浮きあがらなかった。

手首に吸いつくぶきみな大蛭をふり捨てふり捨て、三

人は無言で、強い緑の香を発散する稲の根もとにしぶとくしがみついている水草を引きぬいていった。ぬかれた水草は、その白い軟かいヒゲ根をはじめ日光に射られ、おどろいたようにブルブルとおののかせるが、たちまち真黒な田泥の底へおしこまれ踏みつけられた。

時は大正六年（一九一七年）七月上旬の、ある日曜日のことである。朝早くから、茨城県北部の農村、石塚村大字那珂西の半自半小作の百姓、高峰宗太郎夫婦と、尋常四年生の総領息子の宗次との三人は、村の東の松山下の、那珂川をじかに見おろすこの田んぼへ、田の草とりにきていた。よそではとくに済ませてしまった二番草を、手不足のため、きょうまで手をつけずにいたのである。病気がちの宗太郎は梅雨に入ってから二十日ばかり寝込み、数日前に起きたばかりであった。

那珂川の広い河原のすぐ上のこの一反歩（約十アール）ばかりの田が、現在高峰一家にのこされている唯一の小作田である。村の西の山下に、この数倍の広さで所有していた田は、二年前亡くなった先代、宗右衛門がつくった借金のカタにことごとく人手にわたり、その人手にわたった田の一部を小作している現状なのだ。

宗次は、やせて小柄で、面長の顔の目だけが大きい。大好きな学校を赤ん坊の守のためのべつ休まされ、日曜

になって、守をすぐ下の弟の稔あきに押しつけていい日になると、このように、激しい野良仕事にひっぱり出されるので、心中はなはだ面白くないのである。で、たびたび田からあがっては、イナゴやカエルを追ったり、やぶかげにゴザにくるんでおいてある土瓶どびんから水を飲んだり、尻端折りの泥ズネのまま田の畔ふちに突つつ立って、ぼんやりと崖下の入江を見おろしたり、河原や本流をながめたりしていた。それが母親には気に入らないのである。

夜前、このへん一帯にはげしく降った夕立のため、石ころと砂地の広い河原はしつとりとしめって見える。河原の手前には村人が入江とよんでいる細長い沼がよどみ、河原のかなた、対岸寄りを那珂川の本流が、ひるがえる帯のように白くまた青く、大きくうねって流れている。

涼しい朝も長くはつづかない。稲に、あぜの雑草に、びっしりおいた朝露もいつか消えてしまった。間もなく烈日が背の着物と菅笠をとおして、火の矢を射込む。田水も湯のようになる。いままで、水草をつかんだ指先にビタビタと不意打ちをくわせて逃げまわっていたドジョウたちも、田底の冷たさを慕ってみな深く身をひそめてしまった。ただ、執念ぶかい蛭だけが、にこった水面に、ぬめぬめした黒い胴体をうすきみわるく波うたせ

て、狂気のように人の肌をさがしはじめた。

チーチーと二声三声、遠く、ごくかすかであるが、今年はじめのニイニイ蟬の声を耳にして、思わず宗次は目をあげた。田んぼのすぐ上には、南北に小松山と雑木山がつづいていて、その遠い南の端は、さらに一段こんもりと高まってお寺（宝幢院ほうどういん）の杉森となつてゐる。宗次はその方へ視線をなげ耳をすました。いつの年でも、お寺の森が、蟬のなくのが一番早かったからである。

身をおこした宗次の左右には、川の流れと平行に、水田が細くどこまでも伸びている。これらの田の上で仕事をしている人影については、自分たち三人以外には全くないのを見ても、いかに時期おくれであるかが知られた。

「稔みがやってきたよ」

ふいに宗次が母親の方へどなった。

赤ん坊をおぶった少年の姿が、小松山の中の坂道から、今しもひよいと現われ出たところであった。間もなく少年は三人の働いている田のあぜ道へやってきた。宗次より一つ年下の、尋常三年生の稔である。兄同様やせた小柄の、ひよわそうな子供である。むくんだような円顔と細い目は兄に似ていない。

このときまで泣き疲れたさびしい顔でねむっていた赤ん坊は、母親の近くへきたことを靈感したもののか、急に目をさまして泣き出した。

「この馬鹿ア、この暑さに帽子もかぶせねえで、ねんねが暑氣うけたらどうするんだ」

田の畔で待ちかまえていた母親は、赤ん坊を抱きとりながら稔をしかった。

しばらく肩をさすっていた稔は、思い出して言った。

「おっかさん、さっきな、学校の森山先生がうちさま来たぞ。兄ちゃんをあんまり休ませちゃ、いけねえって、言いきたんだよ」

母親は何もいかなかった。乳首にはぐれてちよつと泣き声をたてた赤ん坊に、乳房をふくませたきりだった。

「暑くて暑くて、おれ泳ぎたくなっちゃった。兄ちゃん、いっしょに水あびて来べえ」

「とんでもねえ。今から水あびなんかに行ったら、かっぱにつかまって、尻めど抜かれちやうから。水あびは夏休み前にはやるもんじゃねえぞ」

弟にさそわれて、その気になった宗次をもふくめて、母はいましめた。

「そうだとも。とんでもねえこった。水泳ぎ自慢の下しもの浅次郎がおぼれたのも、去年の今頃のことだっべえ」と

宗太郎も口を入れた。

いくら大気は暑いといっても、水はまだ冷たいのである。今頃はいると、こむら返りをおこして、不慮のわざわいを招きかねない。それを村の人はかっぱのせいにして怖れていた。

「あれ立場のお爺じいつあまだっぺ。きつと、うんと釣つてるぞ。ほらまた竿をあげた。おれ見にいつてもよかつべえ、な」

稔はよつぽど水に近づきたいとみえ、別の方面から切り出した。

なるほど稔のいうとおり、田の真下七八メートルの崖下に、数町歩にわたってトロリと入江がひろがっている。その向こう岸に、腰をおろした釣師の姿が小さく黒く見える。宗次たちの後隣の家の爺さまである。後隣は、もちろん農家であるが、乗合馬車の停留所にあたっている。乗客や通行人や荷馬車ひきなどがちよつと立ちよつて休息したり食事したりできるように、県道ぶちの部屋を気のきいた茶店風にしたらえ、縁台なども並べて、隠居の老人夫婦がこの方をうけもっている。地酒や一品料理などを用意し、夏はラムネ、トコロテンなどもおいてある。部落の人はそこを立場たてばとよんでいる。立場の源兵衛老人は、店で客に出す煮つけ用の魚を、那珂川へ釣

りにくるのを日課にしていた。

子供の欲望の根強さを知りぬいている親たちは、それもないとは言わなかった。稔は大喜びで、入江の向こう側へまわるべく、田んぼのふちを駆けていった。

入江はサツマ芋形の沼で、数十年前に那珂川の本流がながれていた跡である。河原の東寄りを通っている現在の川筋とは、ごく細いちよろちよろ流れによってほんの一方所つながっているにすぎない。かつて激流にえぐられた河床は、底なしと怖られるほど深く、二三のぶきみな伝説さえ持っている。毎年、少なくとも一回は、台風などによる増水時に、本流と合体して滔々たる濁流の大河と化し、新陳代謝をとげていた。淡水魚なら大抵の種類が棲息し、本流にさえいない魚がこちらにはいるといわれ、鯉や鰻の主がひそむとも、うわさされている。

水面を一直線に行ければ、三百メートル程度の距離である。が、田のあぜ道を迂回し、坂を下り、洲のまわりをほとんど一周して行くのだから、砂地の斜面に腰をおろした立場の老人のそばへ立ったときには、九歳の少年は息を切らしていた。

「稔ちゃんか」

老人はそれだけ言って、トロリとよんだ蒼い水面のウキから目をそらさない。

砂地の斜面の上は、すぐひろびろとした石ころ河原で、強い日ざしに夜来の上めりは全くかわき、まばらにはえた月見草や昼顔その他の雑草のあいだ一面に、かげろうがゆれている。熱くやけた石ころのなめらかな面には、白く点々とカワセミの糞がこびりついている。

ウキがピクピクと動いたと思うと、斜めにグーッと沈んだ。老人の手がおどつて竿がしない、ピンと張りきつた糸のさきに、大きな魚が白い腹をひるがえして抵抗するのが見えたが、老人のたくみな指先にあやつられ、あばれながらビクの中へ入れられてしまった。二十五糎もあるイナである。

浅い水につけられたビクをすばやく覗いた稔は、十尾ちかい大きな魚が横になってエラを動かしているのを認めた。鰻とフナが一尾ずつ、他はみなイナである。イナは入江の名物で、飛行機の大編隊みたいに隊形をととのえたイナの群が、いつでも水面とすれすれに、よんだ蒼い水面に背びれや鼻面^{はなめん}で無数の直線を切りながら游弋^{ゆうぎ}しているのだ。これを釣るには、ウキ下をきわめて浅く針をつける。一尾でも釣りおとしたが最後、それからあとはパッタリ釣れなくなる全体主義的習性をもっている。

今も、向こう岸ちかくの、崖が影をおとしている水面

を、いくつもの直線がススッと敏捷に動いている。と、不意にバシッと水音がした。羽虫を追ってか、仲間にくづかれてか、大きなイナが斜めに寝たような格好で水からはねあがったのである。稔は胸がわくわくし、釣竿をとりやすく家へ戻ろうかと思ったほどである。

老人のもう一本の竿の、白と赤二色の小さいウキも動き出した。この方はウキ下が深くイナ釣り用ではない。老人はその竿をそろっと支え木からとりあげた。稔は息をこらした。老人の手と竿がおどり、十糎ぐらいの金ブナが糸のさきにあばれていた。しかし今度のは、手のとどく寸前、水に落ちてしまった。稔はごくりと唾をのみこんだ。

「稔ちゃん、水に足をいれてちゃ駄目じゃねえか。さかなが逃げちゃうからな」

魚に逃げられたせいか、源兵衛爺さんの声は少しばかりとがっていた。稔は、いつのまにか浸っていた自分の両足を、あわてて引っこめ、

「光ちゃんは、まだ学校へ出られねえの？」と、とりつくろうように言った。

光ちゃんというのは老人の孫娘で、宗次と同級、一つ机に二人でならんでいる。二三日前からおなかをこわして欠席していた。

「光坊けえ、あしたから出られると思うんだ。宗ちゃんにもそういつてくれや」

老人の釣りになおも見とれて、稔は時のたつのも知らずにいた。そのうちに、遠くで自分をよぶ声がしたように思えたので、頭をあげて見ると、向こうの崖のふちに宗次が立って、しきりに手招きしている。

田へもどると、さっそく母親から小言が出た。

「いつまで突っ立って人の釣りなど見てるんだ。兄をみる、けさから一休みもしねえんだぞ」それから声をやわらげて「秀や信たちが、チビッ子ばかりで、なんぼか待っていべえから、すぐ帰って、いろりに火をおこして、お湯わかしときな」

赤ん坊は、涼しい灌木のやぶかげのゴザの上で、すやすやねむっていた。それをまたおぼわされた稔は、はだしの足裏にとげをささぬよう注意しながら、小松林の中の赤土坂をのぼっていった。

二 高峰 家

稔が去ってから二時間はたったであらう、太陽は頭上で白くたぎりながら燃えている。たまらない熱さである。

「もう、刻限だつべ——おお、腰がいてえ」

顔をしかめてからだをおこしたお絹は、思いきり伸びをしようとしたが、クラクラッと立ちくらみがきたので背伸びを途中でやめ、背筋を蛙のようにくねらせた。

「チビたち、なんぼか腹へらしてべえ」とつぶやき、泥水で白くふやけた手で、笠のひもをゆるめた。いくつも泥のはねた顔には、汗粒がいっぱいである。

宗次も身をおこし、力のない声を出した。

「おれも腹へっちゃった。それより、のどがかわいてたまんねえ」

「まだあるかもしれねえ、見てしろよ」と父親がかんだまま、宗次の方をふりむいた。その蒼ぶくれの円顔は、麦稈帽の下で、いつもの暗い笑いをうかべている。

宗次はあぜへあがり、やぶかげの土瓶をとりあげ振ってみた。一滴の水もない。お絹もどっこいしょと大儀そうにあがつてきた。

「駄目、一ったらしもねえ。お寺の崖へ汲みにいって来るか。あすこの清水はひやつこいからなア」

「うちさ帰るまでがまんしろよ」それからお絹はゴザの

上にあお向けになり、しばらく背骨を休めてから、夫の方へむいて「おいら、お昼の支度に戻るから、おとつあんも、いいかげんに切りあげて帰って来なせえよ。黙ってると、きのうのように、三時の馬車が通っても帰ってきねえんだから痴にも呆れたもんだ」と、いつもの口ぶりで注意しておいて、息子をうながして歩き出した。宗次は土瓶をさげて先に立った。

田んぼのすぐ上から、小松林と檜林にはさまれた長い坂道である。のぼりながら二人は、檜林の中に乳茸ちゅうたけがありはしないかと気を配り、草の下にその濃い茶色の傘をみつけると、のがさず取りにはいったので、坂をのぼりきったときにはへとへとに疲れていた。乳茸は晩春から秋にかけて絶えずはえる大形のきのこで、知らぬ人には毒きのことしかみえない色彩と形状をもっている。どこを傷つけても、乳のような真白い液汁を出すので、この名がある。なまのままで食べるし、汁の実にすれば、なかなかいけるのである。

坂がおわると、林はクヌギ林にかわり、まだ青いイガのどん栗が葉のあいだから覗いている。クヌギ林が尽きると、部落の畑地だ。

二人が畑地にさしかかったとき、不意に道の右側のサツマ芋畑から、黒い影がとび出し、行く手をよこぎつ

た。びっくりして二人は立ちどまった。猫ほどもある大イタチである。道をよこぎる途中でイタチはひょいと立ちどまり、二人の方をふりかえると、片方の前足をあげて挙手の礼をした。が、次の瞬間には、陸稲畑の緑のうねの中に消えていた。

「おっかさん、でかいイタチだったね。あいつはずいぶん食いであつたねえ」

逃がして惜しいことをしたという表情を、宗次はした。春さき、父が持病の痔疾でふせていた時分、イタチを食うと芯があたたまると人にいわれ、ワナで捕えて食ったことがある。それを思い出したのだ。鶏でさえ、年に一二度しか食えず、それも、背骨までナタで粉々にくだき味噌でまるめて、幾日ものおかずにするような一家にとっては、イタチは大したごちそうだった。

イタチに挙手の礼をされ不吉な迷信を思い出したお絹は、黙って歩きつづけた。

「イタチの最期つべって、ほんとに臭いもんかな？、ねえ、おっかさん」

それにも答えず、母親は別なことを言い出した。

「坂本の叔父から、誰かを弟子によこさねえかって、また手紙がきたんだ。宗次は東京さ行つて床屋になる気はないかい？」

「床屋の小僧なんておらやだ」

「稔は二番目だから出してもいいんだが、なんぼにも小さくてな」

二人は近道するために寅やん家の庭を通りぬけることにした。庭への細道の両側は、トウモロコシ畑と茄子畑である。丈高くそだった水々しいトウモロコシの太い茎には、赤いふさふさとした髪の毛もった実が、乳でものんでいる赤ん坊のように抱きついて、正午の日光の中でふくらんでいる。中には、大切な実の頭を黒カビのどきものに冒されながら、平気なものもある。茄子もみごとな発育ぶりで、茎や葉はあぶらぎった光沢に光っている。お絹は、それらをほればれと眺めた。

納屋の前には、はらみ女のような唐箕がふんばつていて、地べたに真黒な、カニみたいなかげをおとしていく。納屋の羽目には、篩と箕、使いのこしの種子トウモロコシなどが釘にかかっている。母屋の釜場の軒からは、白い炊煙がゆるやかに立ちのぼっては、青空へ消えていた。

洗いざらしの手拭地のゆかたを着、その上に前掛をしめた、寅やんげの腰のまがつたお秋婆さまが、母屋の南側の軒下にムシロをひろげて、麦をほしている。お絹は、庭の乾草の間を歩きながら笠をはずし、婆さまに挨